

自己防衛のための孤独な戦い

ルゴン＝マッカール叢書における出産場面について

森田 陽子

はじめに

ルゴン＝マッカール叢書は、エミール・ゾラの作家人生の半分以上、実に二十年を越える歳月を費やして編まれた。ちょうど二十巻を数える叢書が、ルゴン＝マッカールという一族の歴史と第二帝政という時代が複雑に絡み合った作品であることは、いまさら確認してみるまでもないだろう。つまり叢書は、第二帝政というきらびやかで退廃的、かつ産業や経済においてはめざましい発展を遂げた特異なフランスの一時代の社会史であると同時に、南仏の架空の都市ブラスサンで生まれたある一族を描いた非常に私的な年代記でもあるということだ。

公と私、つまり社会史と私生活という相反する要素を併せ持つこの叢書を一族の歴史という「私」の部分から読むなら、第一巻の『ルゴン家の運命』のメインテーマは、アデライード・フークと三人の子どもたちの誕生ということになるだろう。アデライードという神経症を患う女性が、ルゴンという夫との間に男の子を、そして夫の死後いつの間にか関係のできた愛人マッカールとの間に二人の私生児を産む。アデライードが本能のままに産み落とした三人の子どもが、第二巻以降、叢書のあちこちに散らばり、人生を送り、それぞれに子をもうけ、家族を形成する。ゾラが叢書が完結するまでに幾度か添付した家系樹のように、アデライードから始まったこの家系は五世代にわたって社会の至る所に枝葉を伸ばしていく。いってみればルゴン＝マッカール叢書とは、一人の母親から始まり、次の世代、またその次の世代へと継承される生命の系譜であり、同時に生命が誕生するさまを絶え間なく描くことで紡がれていく連作小説群でもある。

その点を考えれば、叢書全体を通して出産の場面を含む作品が三作品しかないという事実は驚くべきものではないだろうか。三つ¹の出産場面の内訳

¹ 『大地』ではリーズの出産と並行して牝牛のコリッシュの出産も描かれるので、正確には出産場面は四回あるが、本稿では人間の出産に的を絞る、コリッシュの出産

は、『ごった煮』の女中アデルの屋根裏部屋での出産、『生きる喜び』のルイーズの長く凄惨な出産、『大地』でのリーズの笑い声に囲まれた出産である。これらの出産場面は、当然いづれもそれぞれの作品内での意味を持っている。たとえば、『ごった煮』でのアデルの出産場面は、ブルジョワの偽善という小説の中心テーマを効果的に浮き彫りにしてみせている²。加えて、出産する三人の母親は、属している階級も、出産にいたる経緯もさまざまである。アデルは女中、ルイーズは裕福なブルジョワ、リーズは農婦であり、アデルは私生児を、他の二人は夫との間にできた子を産む。このように各作品内で文脈に沿った個別の意味合いを持ちながら、それぞれに違う背景や事情の下にある三人が出産に臨む場面ではあるものの、出産というある種の極限状態を描いたこれらの場面にはいくつかの共通項もあり、それを分析することはゾラ作品における出産、ひいては親子関係や母親像がどのようなものであるかを探る上で有益であると考えられる。そこで、本稿では上記の三場面を比較検討していきたい。

排泄行為

これらの場面において、出産は、まず第一に排泄行為と非常に密接な関係を持って描かれている。『ごった煮』で、出産の最初の兆候を告げる痛みに見舞われたアデルは、最初、その腹痛を下痢によるものだと思い込む。妊娠・出産に関して何の経験も知識も持たない彼女は、腹痛と陣痛を結び付けることができない。どうすればよいかも分からず、自然に任せて分娩を行う過程でも「下痢」*les coliques*という言葉はくりかえし使われ、出産という行為がアデルにとってのはつねに「下痢」の連続として捉えられていることが示される。また、『大地』に登場する農婦リーズの場合、出産の前夜にひどい下痢に襲われ、それが始まりとなって分娩へと続く症状が次々にあらわれる。リーズの出産では、下痢は出産の前兆となっているわけである。

また、繰り返される「下痢」という表現は「まるでハエにチクチクとわき腹を刺されるような³」感覚の描写が読者に陣痛の痛みを思い起こさせると

はカウントしないことにした。

² アデルが産もうとする私生児の父親は、同じ建物に住む判事のデュヴェイリエらしいとほめかされているのだが、当のデュヴェイリエは、欲望のままにアデルに手を出して妊娠させておきながら、出産場面のすぐ後で、嬰兒殺しを犯した貧しい未婚の母を厳しく断罪することで世間の評判を勝ち得るのである。

³ *La Terre*, in Émile Zola, *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction

ともに、抵抗することもできず体内から水が溢れ出すというイメージを喚起させることでそのすぐ後に訪れる破水を予感させる。律動的で規則的な痛み、溢れ出す水の他にもゾラは出産と排泄のイメージを重ね合わせた描写を織り交ぜている。アデルは「大量の排泄物のまっただ中に⁴」赤ん坊を産み落とし、『生きる悦び』のルーズの子どもはといえば「最後の力をふりしぼって、血と汚水の雨にまみれて落ちた⁵」。赤ん坊を産んだ後、アデルはふたたび「下痢」に襲われるのだが、今度の「下痢」で体内から排出された「袋」*un paquet* を彼女は便器に捨てる。後産もまたアデルにとっては自分の意志では止められない排泄行為であり、その結果生じたものは、当然排泄物として便器に捨てられるべきものだからである。このように排泄行為と密接に関連づけられた分娩の末に排泄物とともに生まれた赤ん坊は、排泄行為の末に生じる排泄物とイコールで結ばれうる存在となる。実際、アデルは生まれた子どもを出産したその晩のうちに舗道にうち捨てるのである。

壮絶な戦いと排出による防御

排泄行為と出産がいかに密接に結び付けられ、赤ん坊が排泄物と同様の不要な存在となってしまうことをここまで述べてきたが、本稿で取り上げる三人の母親にとって赤ん坊とはそもそも不要な、というより厄介な存在であり、排泄行為との関連づけは、その事実を強調しているに過ぎない。彼女たちにとって赤ん坊は、「自分の体にのしかかってくる耐え難い重み⁶」でしかなく、その重みから自分を解放するために赤ん坊を排出しようと必死にもがくのである。母親たちの胎内で成長したこの重みはしかし、きわめて侵略的である。母親の体をのっとり、暴力的にその胎内から外に出ようとする攻撃者に母親たちは脅え、危険を感じ、自分の身を守らなければいけないという本能に突き動かされて全力で戦う。ルーズの分娩のために整えられた部屋は、野戦病院にたとえられている。「布類であふれ、ベッドによって遮断された部屋は、戦争を待ち構えて大急ぎでしつらえられた移動野戦病院の様相を呈

d'Armand Lanoux, études, notes et variantes établies par Henri Mitterand, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1960-1967, 5 tomes (以下、*Pl.*と略し、巻数を記す), t. IV, p. 579.

⁴ *Pot-Bouille*, in *Pl.*, t. III, p. 370.

⁵ *La Joie de vivre*, in *ibid.*, p. 1100.

⁶ *Ibid.*, p. 369.

していた⁷。」この描写が如実に示すように、出産は戦争にほかならない。しかもそれは母と子の、命を賭けた壮絶な戦いである。

しかし、腹と腰の努力によってまだ子どもを押し出そうとしていた。気が遠くなりそうな母親は、この苦役に疲れきりながら、機械的な分娩の欲求によって荒々しくいきんでいた。そして苦痛の波が下り続け、そのたびごとに不可能と戦う執拗さから叫び声を上げるのだった⁸。

このように極限の苦痛に襲われた産婦は、もはや自衛本能から、機械的な反応によって自分の身を守るのみである。そしてルイーズが必死で胎内から子どもを「押し出」そうとするこの戦いは苛烈を極める。子どもが産まれ出る直前、助産婦のブーラン夫人がルイーズの体を押さえつけるのも、ルイーズが傷つかないためというよりは暴れる母親から子どもの命を守るためなのである。

ブーラン夫人は、母親を押さえながら、血まみれの太ももの間で窒息したように首を挟まれたまま横になった子どもを見張っていた⁹。

胎内から子どもが産まれるとき、ルイーズは「ひきちぎられる¹⁰」感覚を覚える。この感覚は確かに母が子と分離されることへの抵抗を表現しているようでもある。しかし出産場面を読む限り、その分離はあくまで肉体的なレベルにとどまっており、母と子の間には特別なつながりや絆といったものは見当たらない。母は子の安否を気にかけることはなく、自分が痛みから解放されて生還することだけに専心しているように思える。もはや自分の子宮を引き裂くようにして外界へ出ようともがく子を相手に戦い抜くことしか考えられないほどに追い詰められている。

ルイーズが昏睡状態に陥り、母子ともに危険な状態にある時、カズノーヴ医師はルイーズの夫で、子どもの父親でもあるラザールに次のように問い、決断を迫る。「どちらを助ければいいんだ？ [...] 子どもか母親か¹¹？」と。象徴的なこの質問は、出産における母と子の立場を表しているように思われる。つまり、分娩という極限状態において母と子は、二者択一で選ばれ

⁷ *Ibid.*, p. 1087.

⁸ *Ibid.*, p. 1096.

⁹ *Ibid.*, p. 1099.

¹⁰ *Ibid.*, p. 1097.

¹¹ *Ibid.*, p. 1093.

るものであり、どちらか一方しか生き残れないという宣告を受けながら、自分の命を守るために死闘を演ずる関係にある。相手は自分の命を危険にさらす敵であり、敵は倒さなければならない。それゆえ母にとって子は厄介で排除すべき存在となるのである。

望まれない子ども

しかし、子どもが三人の母親にとって厄介なのは、生まれてくるときに母親の命を脅かすからというだけではない。子どもは——少なくともこの三人の母親にとっては——生まれてくる前、受胎したその瞬間から厄介で邪魔な存在である。

まずアデルは先に述べたように自分の意志に反して妊娠させられている。彼女にとって生まれた子どもを自分ひとりで育てることは経済的に不可能である。その上、身ごもったことが周囲に露呈しようものなら、自分たちの悪行は棚に上げながら、女中の素行には容赦なく厳しい目を向ける雇い主のブルジョワたちから糾弾され、職を失うことは確実だ。

リーズの場合、夫との間に授かった子どもなので、道徳的に非難されるようなことは何もない。しかし、農村においては、よほどの豪農でもないかぎり、経済的な理由から子どもは決して歓迎されない。食べさせてやらねばならない口が一つ増えたということでむしろ邪魔者扱いされる存在である。実際、出産場面で第二子を産んだあとに授かった子どもを、リーズは秘密裡に中絶している。

では、ルイズはどうか。彼女は若く裕福なブルジョワであり、身ごもったのは夫ラザールとの間にできた第一子だ。経済的にも道徳的にも都合の悪い点はないはずである。すべてにおいて恵まれた若夫婦なのだから、子どもができたことを当然喜ぶだろうと思いきや、そうはならない。ラザールのノイローゼが発端となって徐々に夫婦仲に入り始めていた亀裂を妊娠はさらに広げてしまうのである。

夫婦の距離を縮めるはずだったこの子どもが、二人の確執、つまり寄り添って暮らすことで生じる軋轢を深めてしまったのだった¹²。

子どもはここでは夫婦にとって、かすがいとはならず、むしろ逆に夫婦の

¹² *Ibid.*, p. 1058.

不仲を押し進める障害となっている。そのため母親であるルイズは、出産においても痛みから解放されるために赤ん坊を胎内から排出してしまうことに専心し、生れたばかりの、それも瀕死の赤ん坊のことを気にかける様子はない。母親に見向きもされないこのあわれな赤ん坊を介抱し、蘇生させるのは出産に立ち会った夫婦の友人ポーリーヌである。

しかし彼女は、胎内からうまく生まれそねた子どもでも何とかして生かしてやろうとする母親のような執拗な絶望的な気持ちを注ぎ込んだ。彼女はこの子に生きて欲しかった。そしてついにかわいそうな体が息づくのを、自分の口の下に小さな口から吐息がもれるのを感じたのだった¹³。

ルイズにおいては、痛みの元を吐き出し、また痛みと戦うために「執拗さ」が見られたが、それと相反させるようにゾラは、ポーリーヌの子どもの命を助けるための「執拗さ」を描く。ポーリーヌはこうして実の母親のかわりに子どもの母親の役割を果たしており、ルイズが子どもに対して愛情を見せる場面はついぞ見られない。ルイズが自分の苦痛だけを気にかける一方で、『大地』のルイズは、出産の最中も自分と同じ日に出産する家畜の牝牛、コリッシュの出産のことばかりを考え、自分の子どもよりも、コリッシュが産む仔牛のことを気にしている。アデルに至っては、産み落とした子どもの性別さえ確認していなかったことを思い出して確認するのだが、その直後に赤ん坊を戸口まで捨てに行く。

また、妊娠中、アデルとルイズは腹を締め上げているのだが、これも赤ん坊にとっては大変危険な行為である。現にゾラは『獲物の分け前』において、ルネは妊娠中に腹を締め付けすぎたせいで流産したという一節を書いている¹⁴。腹を締め上げるという行為は、もっぱら母親側の都合（妊娠が周囲に見つからないように、あるいはすらりとした容姿を維持したいために）によって子どもの命を危険にさらしていると言える。アデルとルイズの子どもは二人とも死産ではなかったものの、母親側が妊娠時から出産に至るまでこれほど赤ん坊の安否に無関心であることを思えば、それは単なる幸運であったと考えざるを得ない。子どもを守るという役割は母親以外の人間が果たしている。子どもは、ルイズにとっては経済的な負担であり、アデルにとつ

¹³ *Ibid.*, p. 1102.

¹⁴ *La Curée*, in *Pl.*, t. I, p. 386. 「彼女（ルネ）は流産した。ゆったりとしたスカートで見えなかったというのに、妊娠を隠すために体をあまりに締め付けたために何週間も床につかなければならなかった。」

ては仕事を失わせる危険を持ち、ルーズにとっては夫婦仲の亀裂を広げる厄介な存在だ。このように出産場面で生まれてくる子どもは、母親から望まれず、産み落とされてもその安否さえかえりみられない存在であり、生き延びるために互いに戦う母親と子どもとの間には深い断絶しか見られないと言っていていいだろう。

絶対的な孤独

出産の場面において母親が苦痛から解放されるために必死で戦うことはすでに述べてきた。時に機械的で本能的なこの戦いは、自己防衛のための、きわめて孤独な戦いである。アデルは誰の助けもなく、真夜中に凍りつくような寒さの中、屋根裏部屋で子どもを産む。一人きりで苦痛に耐える彼女の頭をよぎるのは、自分を搾取し欲望に任せて利用する判事デュヴェイリエに代表されるブルジョワ階級への恨みである。

始終腹一杯食えず、マンション中の人間に殴られながらお行儀良くかしまつて下働きするだけじゃ足りないってわけだ。ご主人様たちは子どもまで作らなけりゃ気がすまないらしい¹⁵！

家族の立ち会いのもと、笑い声に囲まれながら出産するルーズでさえ、ある種の孤独を味わっている。二人目の子を妊娠したと分かったとき、夫のビュトーは一方的に彼女を責め、まるでルーズだけに責任があるかのような物言いをする。

この妊娠というやつには腹が立った。おれはあれだけ用心したのに！何だってガキなんかができやがったんだ？彼は妻を叱りつけ、わざとやったんだらうと責め立て、何時間も愚痴をこぼした。まるで物乞いかその辺をうろついている動物が彼の家に入り込みすべて食い尽くしてしまう、とでも言うかのようだった¹⁶。

子どもの父親として当然妊娠の責任をルーズと分かち合わなければいけないにもかかわらず妻を責めるばかりの夫に対して、ルーズは妊娠に対して穏やかで鷹揚に構えており、夫からのいわれのない非難を受け止めるだけだ。妊娠に対する夫婦の態度の違いは、ひいては出産に関しても夫婦の意見が異な

¹⁵ *PI*, t. III, p. 368.

¹⁶ *PI*, t. IV, pp. 566-567.

ることを示唆している。子どもは経済的な負担となるばかりでなく、妊娠、出産をする間、リーズは農婦としての務めを十分に果たすことができないため、夫ビュトーにとっては憤慨の種でしかない。夫の理解を得られずに出産、つまり極限の苦痛との戦いに臨まなければならないという点でリーズはある意味では孤独の中に置かれているのだ。

それではリーズはどうだろうか。彼女は夫との間の子どもを出産するという状況だし、経済的には余裕もある。しかし、出産の最中、彼女を助けるために何人もの人が立ち会ってくれているにもかかわらず、自分は見捨てられているという思いに苛まれる。

動揺の中で彼女の心に浮かんだことはただ一つ、これは永遠に終わらないんじゃないか、周りのみんなはいいやいや付き添っているんだ、という思いだった
[...] 彼女はこの終わりなき苦痛の中に閉じこもった。もはや誰の助けもあてにはすまい、こんなにも見捨てられ、こんなにもみじめになってしまうのなら、すぐにでも死んでしまいたいと思いながら¹⁷。

つまり、リーズが感じているのは物理的な孤独ではなく、人々に囲まれているからこそ感じる種類の孤独である。周囲の人々は自分を助けてくれない、いやむしろ自分を苦しめようとしている、という迫害妄想的な考えであり、精神的な孤独である。もはや周囲に助けを求めることすらできず、自分一人で激痛と戦わねばならないという覚悟を彼女に強いるあまりに深いこの孤独は果たして、リーズの単なる迫害妄想なのだろうか。

立ち会う人々

リーズが感じる孤独は、必ずしも激しい苦痛による錯乱から生じたものとは決め付けられない。なぜならこの出産に立ち会っている人々の中には、すでに述べたようにポーリーヌの存在があるからである。ポーリーヌはリーズとも幼なじみの仲ではあるが、ラザールとは従兄であり、リーズが現れるまではフィアンセ同士であった。ポーリーヌ、リーズ、ラザールの三角関係は、ラザールとリーズの結婚という形で一応の決着を見るものの、ポーリーヌはラザールを密かに想い続けている。しかも、妻との結婚生活に疲れたラザールは、妻の妊娠中にポーリーヌに愛を告白し、出産の直前に彼女と思いを遂げようとさえするのである。僕たちはずっと愛し合ってきたの

¹⁷ *Pl.*, t. III, pp. 1088-1089.

だから、と言って迫る彼を頑固に拒み通しながらもポーリーヌは、心の中ではラザールと結ばれることを熱望している。

彼が言っていることは本当だ。わたしは彼が大好きなんだから、どうしてこの喜びを拒んだりするんだろう？ 世間には二人して隠せばいい。家じゅう寝静まっているし、夜の闇は深い。ああ！ たとえ一時間だけでもお互いの首にかじりついて、彼を抱きしめ、闇に包まれて眠れたら！ ああ！ やっと生きる、生きるのだ¹⁸！

このようにラザールとポーリーヌは肉体的には結ばれていなくとも相思相愛の仲であり、ルイズの妊娠中にさらに互いへの想いを深め合っている。精神的には不貞を犯しているといっても過言ではない二人が付き添ったところで、ルイズが孤独を感じるのも無理はない。リーズについても同様である。リーズの出産にはリーズの実妹フランソワーズが立ち会っている。リーズが妊娠するのとほぼ同時に夫のビュトーはフランソワーズが女として成熟しつつあることに気づき、隙を狙っては義妹に襲いかかるようになる。出産の直前、ビュトーに襲われながらも必死で貞操を守りぬいたフランソワーズだが、実はその頑なな態度とは裏腹に、その肉体はビュトーのことを求めており、それは次のように描写されている。

あいつは挑んでくるだろうか？ しかし彼女は待っていた、自分でも気づかないうちに彼を欲していたのだ。もし手を触れようものなら絞め殺してやると決意しながらも¹⁹。

フランソワーズは自分の意志に反して、ビュトーの荒々しい男らしさに女として本能的な欲情を抱いており、姉妹はビュトーをめぐるライバル関係にある。後にフランソワーズはジャンというマッカール家の血を引く男と結婚するが、性的にはかみ合わない夫婦生活を送る。ジャンに対して冷淡なフランソワーズが本当に欲情を覚えるのはビュトーだけである。小説の最後、とうとうビュトーに抵抗する力を失い、彼のなすがままになった時、フランソワーズが叫び声を上げるのは助けを求めるためではなく、高まる快樂によってであった。つまりこの三角関係において、フランソワーズとビュトーが、本能的に求め合わずにはいられない一組のカップルを形成する一方で、もはや夫に振り向かれることのないリーズは孤独な一角となっている。ルイズ

¹⁸ *Ibid.*, p. 1072.

¹⁹ *Pl.*, t. IV, p. 569.

とよく似たこの状況をかながみれば、二人の産婦がいかにか孤独な戦いを強いられているかがよく分かる。本来産婦の手助けとなるべき立ち会い人の二人の若い女性は、産婦たちの孤独を一層深めているのである。

産婦の肉体

この二人の立ち会い人はまた別の役割も担っている。それは、産婦が苦痛の末に人間性を失い、「物」になってしまう様子を目撃するという役割である。ルーズは、陣痛が始まってからしばらくの間は肌をあらわにした姿を人に、特に未婚女性であるポーリーヌに見られないように、と懸命に自分の体を隠そうとする。それはルーズの異常なまでの羞恥心による行動でもあるが、未婚女性には性にまつわる話題や光景はタブーであり、できるだけ目に触れないようにしなければならないというブルジョワ女性としての良識的な判断も働いている。しかし、分娩が長引くにつれ、あまりの苦痛にルーズは羞恥心もブルジョワ階級の良識もなくし、体を隠そうとする配慮もすっかり忘れて、なりふりを構わないようになる。

ルーズにはもう聞こえていないようだった。心ならずも続いている努力によって体をこぼらせ、頭を枕の上で左向きに投げ出し、口を開けて、瀕死のあえぎにも似た低く切れ目のないうめき声を上げた。まぶたを開けた時、まるで知らないベッドで目を覚ましたかのように、彼女は錯乱しながら天井を見た²⁰。

自分の意志とは関係なく努力を続ける体と、今にも失われようとする意識の中で、ルーズの耳にはもはや何も入らず、自分がどこにいるかも分からない。痛みに対して機械的に反応を続けるだけの体から、意識が消え、何も知覚できなくなってしまう。そして、ついにはルーズという人間が消えてしまうことになる。

ルーズはもういなかった。まるで物のように自分の身を投げ出してしまったばかりだった。女らしい羞恥心や、醜い姿や裸を見られることへの嫌悪は苦痛に負けてしまい、とうとう消え失せてしまった。指を上げる力すらなく、自分が肌をあらわにしていることも、人々が自分の体に触れていることも自覚していなかった。胸までむき出しにして、腹をさらし、脚を広げて彼女はそこにい

²⁰ *Pl.*, t. III, p. 1095.

た。ぴくりともせず血まみれの大きく開いた母性を露呈しながら²¹。

ルイズという女性の人格の核となっている女らしさ、つまり慎み深さや羞恥心を失ってしまったのは、彼女はもはや人格を持たないと言っていい。しかも、ここで母性と表現されているものは、一切の精神性を排除された血まみれの女性器である。もはや人間ではなく、「物」になってしまった彼女の裸体は、禁忌ではない。

この裸体は彼らにはもう見えないといっていいくらいだった。彼らの目に映るのは、哀れを催させる悲慘、愛という概念を破壊してしまうこの誕生の争いのドラマだけだった²²。

ルイズの裸はポーリーヌに恥じらいや気まずさを催させることはなく、その悲惨な姿は同情しか覚えさせない。それどころか、裸体であるということが分からなくなってしまうくらい、女の裸体が本来持っている意味をすっかり失くしてしまっているのである。

一方フランソワーズは、未婚ではあるが、ブルジョワ階級に比べれば性的にかなり奔放で自由な農民たちに混じり農村に住んでいる。収穫祭の後には若者たちは破目を外し娘たちが妊娠する、とゾラが描くことから分かるように、農村では娘たちは早熟であり、農民たちも娘たちの奔放さに時には目をつぶる。しかし、フランソワーズが早熟であり、同じ家に住む姉夫婦の夫婦生活を間近に知る境遇にあったとは言っても、普段は目にするものない姉のあられもない姿にある種の気まずさを覚えることはもちろん十分にあり得ることである。牛の種付けなどの際には生殖を自然現象の一つとして、確かに何の恥じらいも覚えずにいられるフランソワーズであるが、姉の夫であるピュトーと一緒に暮らし始めてからは、彼の粗野で男性的な肉体を目にして情緒が不安定になるなど思春期らしい複雑な反応を示しているのだから。しかし、姉ルイズの出産の光景がフランソワーズに与えたのはただ驚きのみであった。

困惑してそれまで何も見ていなかったフランソワーズは突然姉の前に立って愕然とした。姉の裸はちぢんでいるようだった。ひざが、丸い穴のあいた球のような腹の左右に高く上がっているところしか見えなかった。それはあまりに予

²¹ *Ibid.*, pp. 1095-1096.

²² *Ibid.*, p. 1096.

想外で、醜悪で、巨大だったので気まずさを覚えることはなかった²³。

結婚前の若い娘は、職業的に慣れている他の立ち会い人（『生きる悦び』においてはカズノーフ医師や助産婦のブーラン夫人、『大地』の場合は経験豊富なフリマ婆さんと獣医パトワール）に比べれば、出産の光景に対して比較的慣れである。その上、性に対しても敏感な年頃だ。しかし、そんな若い娘でさえ気まずさや恥じらいを感じず、呆然とするだけであるということが、産婦の裸体の醜悪さを何よりも如実に物語っているのだ。

苦痛と戦う中で、ルイーズは「機械的な分娩の欲求²⁴」により赤ん坊を産み出すという一節はすでに引用した。意識を失い、自分がどこにいるのかも分からなくなり、苦痛に抵抗するための一体の機械となってしまった産婦の裸体は人格を持たない。そしてこの体は、もはや裸体の持つ力、たとえば『ナナ』で女優であるナナがヴァリエテ座の観客のエロスに働きかける強力な影響力や吸引力、人々に何かを喚起するような力を持たない。裸体は、裸体が持っていた意味を失い、ゾラがここで言うところの母性、つまり生殖器官へと還元され、ついには一つの「穴」になってしまう。『ごった煮』のアデルは、子どもを産み落とすその刹那、次のような感覚に襲われる。

すべてが壊れてしまうような気がした。前も後ろも裂けて一つの穴だけになってしまい、そこから自分の命が流れ出すような恐ろしい感覚を覚えた。そして
[...] 子どもはベッドにころがり落ちた²⁵。

意識も人格も人間性も失った挙句、「穴」から赤ん坊とともに産婦の命までもが流れ出してしまい、その結果、彼女の存在は消滅し、「穴」だけが後に残る。ゾラが描く壮絶な出産は、このように産婦の存在が完全に消滅することで完結するのである。

結び

こうして、出産の場面を集中して読んでみると、ゾラが描く出産に関していくつかのことが明らかになる。

まず陣痛から後産まで出産のプロセスの各段階はつねに排泄行為と結び付

²³ *Pl.*, t. IV, p. 587.

²⁴ *Pl.*, t. III, p. 1096.

²⁵ *Ibid.*, p. 370.

けられており、われわれ読者が出産の場面から生命誕生の瞬間の尊さや美しさを読み取ることは不可能である。ゾラが描くと、出産もまた下痢と同じ生理現象の一つに過ぎなくなる。ここには、子を産むという行為を、あえて目を背けたくなるようなグロテスクで血みどろの場面とすることで出産を美化することを避けようとするゾラの強い意志が感じられる。

また、苦痛からの自分の解放、つまり自己防衛は、ゾラが描く母親たちにとっての急務であり、唯一の関心事であるとともに出産という行為において一番の目標となっているように思える。自己防衛のためには自分の子どもを気遣う余裕はない。出産をする三人の女性にとって、子どもは苦痛の元であり、自分の生活にとってそれぞれの理由で厄介な存在である。子どもは、経済的な負担、失職の危険となり、あるいは夫との夫婦生活をより険悪にするものである。今の自分の生活を脅かしかねない子どもという存在は、この世に生まれ出ようとする時、産婦の命までも危険にさらす。侵略者たる子どもから自分の身を守るために彼女たちは戦うのみである。

そして子どもを必死に排出しようとするとき、母親は、孤立無援の状態での戦いを強いられている。物理的には孤独でない場合、ゾラはあえて彼女たちの周囲に孤独を一層際立たせるような人物を配置する。そのため、たとえ人々に取り囲まれていたとしても、産婦たちは精神的な孤独の中で、誰にも頼ることができずに、やがては意識を失いそうになりながら、苦痛への抵抗を試みる。この段階において、母親の肉体は、もはや持ち主を失い、精神性、ついには人間性をも奪われて、それ自体が自律した一つの生殖器官へと還元される。

ルゴン＝マッカール叢書で子どもを産む女性は他に大勢いるにもかかわらず、ゾラはあえてこの三人を取り上げてその出産場面を描いた。ここに描かれているのは、生命の誕生や母子の特別な絆に関して一切の美化を禁じられた出産である。ゾラは、母と子の間で繰り広げられる生き残りを賭けた壮絶な戦いを描き、血と汚物にまみれたグロテスクで凄惨な描写を重ねる。自分を守るために、弱肉強食の世界で生存競争に勝ち残るために、全力で戦う人間の描写は、ゾラ作品の読者にはおなじみのものだ。しかし、ゾラの描く母親像を探ることに焦点を当てて読む時、これらの出産場面で特筆すべきことは、出産する母親たちが、まさに胎内の子どもを分娩しているながら、いかに自分が母親であるという意識を持たず、いかに母親らしくないかということである。ポーリーヌが人工呼吸によってルイズの子どもを蘇生させようとする努力にゾラが母親、という修飾語を冠し、彼女の中に母親らしさを見る

とするならば、出産する母親たちには母親らしさをまるで見出していないと言えるだろう。言い換えるならばわれわれはここに、子どもが母親の胎内で育ち、母親がそれを産み落とすだけでは母子の絆や母親らしさは自動的に生じない、という「生みの母」の妄信へのゾラの否定的な見解を読み取ることができる。そしてゾラが、子どもを産むことよりも、生まれた子どもに食べさせ、守り、育成していくことの方を母親らしさと捉えていることも見て取れる。このような描き方の中には、「生みの母」以外の人間と子どもとの関係にしばしば母親らしさや擬似的な親子関係を見るゾラ特有の母親像や親子観が表れていると言ってもいいのではないだろうか。